

パックス・ブリタニカ前夜の西地中海

——マグレブ・虜囚／奴隷・大西洋——

金澤周作

はじめに——地中海における「もうひとつの奴隷貿易」

フェルナン・ブローデルの大著『フェリペ二世治世期の地中海と地中海世界』（1949年）を嚆矢として、地中海に注目する歴史学的研究は多方面に展開してきている。ペリグリン・ホーデンが2014年にまとめているところに従えば、ブローデル以降、地中海史は大きく分けて4つの路線に分類できるといえる。第一は、看板としての地中海史。すなわち、限定的なテーマを有意義に見せる便法として「地中海」というブランドを利用する流れである。「アトランティック・ヒストリー」や「東アジア海域史」などにも通底する現象で、総じてネガティブに評価されがちであるが、他方、この共通タイトルのおかげではじめて関係性が浮かび上がる個別テーマ群はあり、越境的な共同研究を誘発するプラットフォームとして有益であるとも言える。第二は、（多主体が行き交う）海の歴史としての地中海史で、国はもとより宗教・宗派もエスニシティも動機も異なる無数の人々の動きと遭遇の軌跡が描く図柄を多様に提示してきた。第三は、環境史ないし人文地理学として追究される地中海史。そして第四は、（ハイブリッドな）文化領域としての地中海史で、たとえばモーリー・グリーンンの『海賊と商人の地中海』（2010年）は、イスラームのオスマン帝国に属する正教徒ギリシア商人が、キリスト教勢力によって敵として拿捕され奪われた自分の財を、同じキリスト教徒として、キリスト教勢力の司法制度に訴えて、取り返そうとする姿を活写して読者の蒙を啓いてくれた。

本報告は、上記の第四の路線に自らを位置づけている。16世紀から19世紀

初めにかけて、地中海、とりわけその西部において、非常に特異な「奴隷貿易」が行われていた。マグレブ（エジプトを除く北アフリカ；アルジェ、チュニス、トリポリ、モロッコ）のムスリム諸勢力によって虜囚となったキリスト教徒を、キリスト教圏の諸主体が買戻し、そして、（より少ない規模ではあるが）キリスト教圏で虜囚となったムスリム虜囚を、マグレブの諸主体が買戻すという相互的な実践である。この「奴隷貿易」（あるいは身代金ビジネス）が興味深いのは、ほぼ同時期に、大西洋ではキリスト教諸勢力による「黒人奴隷貿易」が隆盛を極め、私たちの歴史的「奴隷貿易」イメージはほぼこちらの現象から形作られているのだが、地中海の「もうひとつの奴隷貿易」の担い手と対象が、これと大きく異なっている点にある。一方で黒人を平然とモノのように扱い、他方で異教徒によって自由なキリスト教徒が虜囚とされることの理不尽を嘆いてその救出に尽力し、さらに他方で、ムスリムの虜囚を売買し、ガレー船などで使役する——。ヨーロッパ人とは一体何なのか。

西地中海で行われていたこの奴隷貿易は、17世紀が最盛期だったこともあり、近年盛んになってきた多くの実証研究も17世紀に集中している。しかし、これは18世紀になっても根絶されることはなく、19世紀初頭まで続いた。一般に、長い18世紀のうちに、地中海におけるキリスト教圏とムスリム圏の力関係は前者優位の状態に固定されたと考えられていて、しかもそのキリスト教圏の中で、イギリスは、第二次英仏百年戦争を勝ち抜き、産業革命の震源地となり、1807年には奴隷貿易からも手を引いて、軍事的にも経済的にも、そしてモラルの点でも、ヘゲモニー国家へと登りつめつつあったとされる。にもかかわらず、イギリスはまだ、マグレブとの奴隷貿易に否応なく巻き込まれ、対応に苦慮していた。本報告はイギリスの、19世紀初頭のある虜囚買戻し案件を素材にして、この「もうひとつの奴隷貿易」の終盤の姿を考えてみる。

1. 地中海と大西洋の奴隷貿易の交差

そこで注目したいのはモロッコである。地中海にも大西洋にも面した北アフ

リカの国にして、多くの虜囚を常時抱えていたモロッコは、大西洋黒人奴隷貿易と地中海白人奴隷貿易の世界が切り結ぶ舞台であったからである。18世紀モロッコの白人虜囚を扱った古典的な論文（1960年）の中で、ノーマン・R・ベネットは、南方からの黒人奴隷も多数存在して入り混じっていたモロッコの（マグレブ世界の中での）特殊性を強調する。しかし、クリスティン・E・シアーズの2019年の論文は、モロッコにおける多様な主体の関わる虜囚解放プロセスを概観し、これを「両アメリカ、中東、アフリカに見られる広範囲にわたるタイプの貿易」だと論じてむしろ普遍性を強調する。

では、大西洋黒人奴隷貿易と地中海白人奴隷貿易（身代金ビジネス）の異同をどう理解すればよいのか。モロッコ沖で難破し虜囚となった奴隷貿易船アナ号船長のジェイムズ・アーヴィングの経験（1789-1790年）を再構成したスザンヌ・シュウォーツの1995年の著書は、アーヴィング自身、そのナラティブにおいて自らの境遇を黒人奴隷のそれに比する発想がほとんど皆無であったことから、マグレブで「偶然的な状況から生まれる虜囚」と、「大西洋奴隷貿易の精緻な経済システム」の間に明確な差異を認めている。しかし、ダニエル・ヴィトカスの2019年論文では、「新しい資本主義秩序により、奴隷の獲得と購入は、それ自体が特定の経済的な制度として、長期の、ときには一生涯にわたる労働力の正当な源泉として、人間のラディカルな商品化として、再想像されることになる」と説き、二つの奴隷貿易を、地中海と大西洋を共に覆う資本主義（近代世界システム）の一環として把握する。

このように見解が分極化している状況においては、原理的、抽象的に考察を進めるよりも、広く複雑な全体の中でマイクロなレベルのエピソードを観察する必要があるだろう。そこで以下では、1815年から16年にかけてモロッコで起きた小さな案件——サプライズ号乗組員のモロッコでの虜囚化から解放まで——を、文脈化しながら再構成してゆくことにしたい。

2. 近代イギリスにおける虜囚買戻し実践とベットン財団

まずはイギリスにおける虜囚買戻し実践の状況について概観しておく。1640年現在、北アフリカには約3,000人のイングランド人虜囚がいたとされる。この深刻な現状を打開すべく、1642年に虜囚買戻し条例が定められ、1660年代初頭までは虜囚買戻し費用は税金でまかなわれ、議会主導で買戻しがすすめられた。しかし、王政復古（1660年）以後、海軍増強などの効果もあって虜囚の数が大幅に減少したため、18世紀初頭までは場当たりの国王の名で教会勅書——虜囚買戻し費用のための全国募金勸奨——が発布され、ときどきの必要に対応するにとどまった。しかも、18世紀初頭のうちに、さらに虜囚問題は周縁的なものとなり、教会勅書でのこの目的の募金さえもなされなくなる。あとは主として、散発的に民間でチャリティ的に資金が準備されたと考えられている。こうした民間主導の対策を担った重要なチャリティが、本報告が着目するサプライズ号案件にも深く関与するベットン財団であった。

シティ・オブ・ロンドンの12大リヴァリ・カンパニーの一つ、金物商組合のメンバーであった富裕なトルコ商人トマス・ベットンは、1723/4年2月15日付の遺言状により、2万ポンド強の遺産を基金化し、その基金の運用から得られる年収益の半分を「トルコまたはパーバリ [=マグレブ] のイギリス人奴隷の身請け」目的に指定した。イギリスのチャリティ史における分類でいえば、慈善信託の形式であり、元本が減少しないので原則として半永久的に当該目的を続ける点に特徴がある。実際に、ベットン財団は1734年から1825年にかけて、断続的に数十ポンドから数千ポンドの金額を、マグレブの虜囚救出のために支出しており、その詳細な経緯を記した膨大な史料も残している。本報告が用いる史料もここに含まれている。

3. 19世紀初頭のモロッコ

次に、サプライズ号案件の生じた19世紀初頭におけるモロッコの事情を説

明しておく。P・G・ロジャーズの研究に詳しいが、要衝ジブラルタルを領有していたイギリスは、物資補給および戦略上の観点から、18世紀以降モロッコのスルタン政府との外交関係を徐々に緊密化していった。18世紀の後半には、モロッコを拠点とする私掠者がイギリス船を拿捕して乗組員を虜囚化する例はみられなくなり、海難によって漂着して現地人によって虜囚化されたイギリス人船員についても、スルタンが責任をもって買い上げて帰国させることになっていた。しかし、実態はかなり異なっていた。ジェイムズ・グレイ・ジャクソンの『モロッコ帝国詳論』（1811年）は、モロッコ滞在十数年の経験と当時としては珍しいアラビア語運用力を活かして書かれた、直近の事情を精彩に伝える稀有な著作であるが、それによると、大西洋に面したモロッコ沿岸の海域は、遠浅で、陸地が平坦なため沖から視認しにくく、危険な砂洲が点在し、砂漠由来の砂混じりの空気ゆえに視界が悪く、強い潮流もある、という海難多発地帯であった。

ジャクソンによれば、1790年から1806年のうち、モロッコ側が認知したイギリス船の海難は17件、乗組員は200名にのぼった。そのうち、溺死・殺害・改宗のいずれかによってイギリス側に手出しができなくなった者が80名、1年から5年の間に買戻しされた者が80名いたが、領事が身代金を提示しなかったために「砂漠に消えた」者が40名であったという。この書き方からは、スルタンによるスムーズな買戻しと無償返還という図柄は浮かんでこない。実際、南部沿岸地帯を含むウェディヌーン地方は、名目的にはモロッコ皇帝の領土だが、半自立勢力が事実上の支配権を握っていて、キリスト教徒の虜囚についてスルタンが容易に介入できない状態であった。それゆえ、誰かが船の座礁を知ると内地の宿営所へ急報が届き、数日のうちに現地の部族が武装して現場に出向き、難船員の身ぐるみを剥いだ上で、内陸へと連行した。彼らキリスト教徒虜囚はさまざまな市場で売り買いされた挙句、多くの場合はユダヤ人旅商人によって買い取られ、拠点の町ウェディヌーンへ集められる。この旅商人らはヨーロッパ人領事のいるモガドールへコンタクトを取り、身代金交渉を進める。身代金の相場は一人当たり150スペイン・ドル（37.5イギリス・ポンド）

である。

以上のように、サプライズ号を待ち受けていたのは、モロッコの危険な海域と不安定な政情であり、頼ることができたのは、イギリス政府ではなく現地の領事（この当時はまだ外交官というよりも商人代表）、ならびに民間の慈善団体であった。それでは、ベットン財団の史料群をもとにして、具体的な経緯を見てゆこう。

4. ケーススタディ——サプライズ号案件、1815-16年

1815年12月5日、サプライズ号は、西インド諸島に運ぶ大量の乾燥食品類——1807年の奴隷貿易廃止後も続く奴隷労働に立脚して経営されるプランテーション用だと推定される——と、乗組員18名、および積荷を発送したジェイムズ・ブラック商会の社員2人と事務員1人を載せて、スコットランドのグラスゴーから出航した。しかし、2週間におよぶ嵐に翻弄され、同月28日、モロッコ西岸で岩礁に乗り上げて、難破した。このとき2名の乗組員が溺死したが、無事に漂着したその他の人々は全員、現地のアラブ人部族集団によって虜囚とされた。煩瑣になるので詳しい日付は省き、解放までの流れを五つの段階に分けて略述する。参照した史料の系列は複数あり、それらをいかに組み合わせ用いるかといった史料批判を含む詳細な議論は別稿を期したい。

第一段階。サプライズ号の生存者は数名単位で別々の集団によって虜囚とされたが、海難地点付近を拠点とするアビダラ族内部で、虐待に近い扱いを受けながら複数回取引され、最終的にはあるユダヤ人商人の仲介によって現地の虜囚取引人に売却された。そして、この取引人の手からウェディヌーン地方の事実上の支配者イシェームのもとに買い集められた。

第二段階。上述の虜囚取引人の指示によりイギリス人虜囚たちはモガドール在住のイギリス副領事ウィリアム・ウィルシャーに救出依頼の手紙を書かされていた。この手紙を受け取ったウィルシャー自身は、ロンドンのレンショー商会の代理商であり、また（ベットン財団を擁する）金物商組合の現地代理人で

もあった。ウィルシャーはさっそく、サブライズ号の荷主であり社員を同乗させていたグラスゴーのブラック商会と、ロンドンのベットン財団とに詳しい情報を送り、同時に、イギリス副総領事と協力してスルタンに陳情し、モロッコ国費での買戻しを依頼した。

第三段階。イギリスとの協定に基づき、スルタンはウェディヌーン地方の南に接するスース県の総督アーゲナーゲに対し、国費による虜囚買戻しを指示した。しかし、総督アーゲナーゲと虜囚を握っているイシェームは不倶戴天のライバル同士であったため、イシェームは法外な身代金額を要求して交渉を故意に停滞させた。これを知ったウィルシャーは深く憂慮するが、一旦スルタンの命令が出た以上、イギリス側から介入することはできず、しばらく打つ手が見つからない。

第四段階。一方イギリスでは、ウィルシャーからの急報に接したブラック商会はロンドンのレンショー商会に身代金の送金を依頼したが、ほぼ同時にベットン財団も身代金支出を決定し、レンショー商会に立替を要請した。結果的に、身代金の支出はベットン財団が担うことになった。

第五段階。身代金の用途が立ったことを手紙で知ったウィルシャーは、現地ムスリムの「友人」を間に立ててひそかにイシェームと交渉させ、根回しが済んでから、アーゲナーゲに身代金用の資金を提供した。つまり、アーゲナーゲは国費で支出したという体裁で、ウィルシャーから提供された5,000スペイン・ドル（1,250イギリス・ポンド）——先述のジャクソンの記した相場からすれば20人弱の虜囚買戻しには高すぎる額——をイシェームに支払い、イシェームは金の真の出所を知らないふりをしてこれを受領し、虜囚たちの身請けが実現したのである。アーゲナーゲおよびスルタンの体面とイシェームの金銭的欲求（とアーゲナーゲへの復讐欲）を共に満たす政治的な術策が功を奏した形になった。解放された彼らは一転、ムーア人や黒人奴隷が歌い踊るアーゲナーゲ主催の宴席の客となり、しばらくの後、帰国の途に就いた。

おわりに——二つの奴隷貿易・奴隷制度

サプライズ号案件から見えてくるのは、解放までの手続きが、主として商業的になされた事実である。そこに、宗教間対立の要素はほとんど見て取れない。キリスト教徒虜囚は、現地アラブ人部族の間でも商品であったし、イシエームとウィルシャーの間でも商品であった。その点で、大西洋の奴隷貿易における黒人の運命と近似している。「もうひとつの奴隷貿易」もまた、大西洋黒人奴隷貿易と同じく、「新しい資本主義秩序」(ヴィトカス)を成していたと言えそうである。

ところで、先述の通り、サプライズ号を送り出したブラック商会は、西インド諸島の奴隷制度に加担していたと思われる。にもかかわらず、史料を読む限り、モロッコで虜囚となった同社社員を含む海難者たちは、売買の対象になることを経験しても、虐待されても、現地の黒人奴隷を目撃しても、先に紹介したシュウォーツの描くアーヴィングと同様、自らの境遇を黒人奴隷貿易と結びつけることはなかった。本当に彼らは、同時期に大西洋と地中海で展開した「奴隷貿易」に何の連関も見出さなかったのであろうか。シュウォーツの言う通り、二つの「奴隷貿易」の間には、認識レベルの連想さえ阻む本質的で明確な断絶があるのだろうか。

ヴィトカスとシュウォーツの相異なるそれぞれに説得的な主張に対して、より有効な代案を示すかもしれない手掛かりを紹介して、本報告を終えることにしたい。サプライズ号の虜囚たちの身代金を支払ったベットン財団(金物商組合)は、虜囚たちが帰国した直後、同じ1816年にエクスマス卿がイギリスとオランダの海軍を率いて行ったアルジェ遠征——マグレブの虜囚問題に最終的な決着をつける端緒となった事業——の功業と、サプライズ号の虜囚解放を結び付けた出版物を刊行した(1817年)。その中では、モロッコの「無法な遊牧アラブ人諸部族」は厳しく断罪され、彼らを制圧しない限り「キリスト教徒奴隷制の完全廃止の希望」を抱くことはできないと訴えかけられている。そして、このたびのエクスマス卿の「決定的な勝利」は、この奴隷制廃止という

「非常に望ましい目的」の達成への重要な一歩であって、それは「人類の友みなにとってまさしく慶事」だと評価するのである。筆者には、このかなり独善的な自己イメージには、大西洋黒人奴隷貿易・奴隷制度の暴虐と、それを廃止する人道主義的な運動の両方が、ねじれた仕方では投影されているように見え、それこそが「もうひとつの奴隷貿易」の終盤期を規定する歴史的状況のように思われるのだが、その検証は、今後の課題である。

主な参考文献

Betton's Charity: Correspondence and papers about the crews of the "Montezuma" and the Surprise", including accounts of capture, crew list, and correspondence about ransom Ref: Guildhall Library, CLC/L/IB/G/032/MS17034/010.

James Grey Jackson, *An Account of the Empire of Marocco, and the Districts of Suse and Tafilet...*, Second Edition (London, 1811)

David Abulafia, *The Great Sea: A Human History of the Mediterranean* (OUP, 2011).

Norman Robert Bennett, 'Christian and Negro Slavery in Eighteenth-Century North Africa', *Journal of African History*, 1-1 (1960), pp.65-82.

Peregrine Horden and Sharon Kinoshita (eds.), *A Companion to Mediterranean History* (Wiley Blackwell, 2014).

P. G. Rogers, *A History of Anglo-Moroccan Relations to 1900* (Foreign and Commonwealth Office: London, 1977).

Susanne Schwarz (ed. with an introduction), *Slave Captain: The Career of James Irving in the Liverpool Slave Trade* (Bridge Books: Wrexham, Clwyd, 1995).

Do, 'Ransoming Practices and "Barbary Coast" Slavery: Negotiations Relating to Liverpool Slave Traders in the Late Eighteenth Century', *African Economic History*, 42 (2014), pp.59-85.

Christine E. Sears, "'Arab speculators," states, and ransom slavery in the Western Sahara', in Mario Klarer (ed.), *Piracy and Captivity in the Mediterranean 1550-1810* (Routledge, 2019), pp.144-163.

Daniel Vitkus, 'Unkind dealings: English captivity narratives, commercial transformation, and the economy of unfree labor in the early modern period', in Klarer (ed.), *Piracy and Captivity*, pp.56-75.

その他の文献については、次を参照。

金澤周作「もうひとつの奴隷貿易——近世地中海における虜囚と身代金」『西洋史学』267号 (2019年)、57-70頁。